

家庭科の男女共修をすすめる会

会報

'83 冬

連絡先

東京都渋谷区代々木2-21-11
婦運会館内 T151

振替 東京九一九一八九一

発行 一九八三年二月二十四日

家庭科があぶない！ いま、新たな運動を！！

家庭科「女子のみ必修」の時代は終わろうとしています。

けれども、「男子には不要」「男子には教えられるべき」という声も依然として強く、必修科目を大中に減らそうという中教審・文部省の方針もあって、このままでは、かたちの上で男女の扱いに差はなくなっても、「女子のみが選択する」あるいは「男女ともに学ばない」教科になってしまいかもしれません。

今、すべての関係者は、時代の大きな流れを直視しながら、教育のあるべき姿に近づけるために力を合わせるべきです。

「男女ともに学ぶ」家庭科によって自立した男女を育て、伝統的な男女の役割を変えて男女平等を実現させるために、新たに運動を盛り上げましょう。

一月二十一日に集会を開きます

新たに運動を盛り上げることをめざして、次のように集会を開きます。

△テーマ▽家庭科があぶない！

△目的▽ 一月二十一日（土）

午後一時半から四時半まで

△場所▽ 婦運会館（☎三七〇・〇二三八）

△報告者▽ 女子教育問題研究者の立場から

日本女子大教授 一番ヶ瀬康子さん

教組の立場から

都高教婦人部長 森口藤子さん

現場教師の立場から

都立松が枝高校教諭 荻谷 薫さん

もくじ

家庭科があぶない！	(1)
授業参観報告	(2)
久保田真苗議員との懇談	(6)
文部省の新しい連絡会議に要望書	(6)
世話人会報告	(7)
中教審・教育内容等小委員会の報告	(8)
全国家庭科教師一八六六人の意見	(9)
日教組教育制度検討委の報告	(10)
国際家政学会アジア地区セミナー	(11)
各地から	(12)
山形県・埼玉県・東京都 神奈川県・長野県	
連絡会報告	(15)
二つの集会	(15)
共修問題久しぶりにテレビに登場	(16)
事務局だより	(16)

△参加費▽ 三〇〇円

三人の方から現状と将来の展望について話していただき、どう行動したらいいか考えましょう。

ちらしを一枚この会報といっしょにお送りします。おさそい合わせの上ぜひご出席を！

授業参観報告

十月十九日

東京都立農林高校

立川から青梅線で20分あまり、東青梅の駅をおりて冷たい雨の中を歩くと、すぐに都立農林高校の真新しい建物が見えて来ました。玄関を入ると、もう農林高校の先生がたの手で、受付の準備がすっかり出来ていました。参観者控室にあてられた。カピカの調理室でお茶をいただき、十時五十分から視聴覚室で二年生の「家庭一般」の授業を参観しました。内容は食物で前半が栄養素としてのカルシウムと鉄について、後半が食品添加物について。男子11名、女子21名。樋口照子先生は十年選手とは思えない若々しさで、たいへんわかりやすく楽しい授業でした。

授業の内容

栄養素とその働き — 無機質 —

- △カルシウム▽
1. カルシウムの働き
まず黒板に大きな紙が貼られました。二年生のお弁当についての調査結果で、カルシウムと鉄が不足していることが示されます。次の貼り紙は東京都予防医学協会による調査結果で、小学生、中学生に貧血がいかにかに多いか(小学生では実に70%が治療を要する程)示され、食生活に原因があると説明されます。続いて黒板に書き、生徒に質問しながら、カルシウムがどんなにたいせつか説明がありました。
 2. カルシウムの吸収 (カルシウムはそれだけでは吸収されにくいこと。食物は片寄った食べ方をしてはいけないということ)
 3. カルシウムの摂取量 (一日にどれだけ必要か)
 4. カルシウムを含む食品 (必要量をとるにはどれだけ食べたらよいか)
カルシウムを多く含む食品を黒字で、あま

り含まない食品を赤字で書いた紙が貼られ、実物も置かれて、生徒たちがよく食べる食品で必要量を満たすことがむずかしいことが示されました。

△鉄▽

1. 鉄の体内での働き (特に、鉄を含むヘモグロビンの働き)
貧血していなかったから助かったという先生自身の出産の体験談に、生徒は身をのり出すようにして聞き入っていました。
2. 鉄の所要量
3. 鉄の吸収について (肉や魚の中の鉄は吸収されやすいこと、野菜の中の鉄は動物性食品といっしょに食べると吸収されやすいこと)
4. 鉄を多く含む食品 (実物を示して、生徒があまり食べない食品に多いこと)

食生活の現状

— 加工食品と食品添加物 —

休憩のあと、机を並べかえて生徒は6つの班に分れ、加工食品のあき袋やびんを見て、どんな添加物が入っているか書き抜き、班ごとに発表しました。

共修家庭科の

これまでの経過

(当日配布の資料から)

【共修実施に到るまで】

農林高校には五つの学科(園芸科・食品製造科・農業土木科・林業科・家庭科)があり、以前は専門の学科でホームルームを構成していたため、男女共学をたてまえた学校でありながら、ホームルームはそうならなかった。(農業土木科・林業科は男子のみ、家庭科は女子のみ)その結果、学科やクラスによって学習意欲に差がついたり、女子だけのクラスは無気力になり、男子のみのクラスは粗暴になって授業がやりにくかった。

そこで、昭和47年からホームルームは各学科の生徒を均一に配分し、男女の比率も同一にした。

その時に女子のみ必修になっている「家庭一般」の扱いについても検討した。

女子のみ必修ということは「共学」という学校の指導方針に沿っていくいし、教育課

実際に加工食品を買うとき、袋に書いてあることをよく読むかどうか質問すると、見なという生徒が大多数。いつもよく見ると答えたのは男子が一人だけ。

添加物の入った加工食品をどうしてよく買うのか班ごとに話し合った結果は、「おいしい」「味がいい」「口あたりがいい」が圧倒的。「無添加のものがないから」という声も。「私を使うのはすぐ食べられて便利だからだけれど、そう思わない? それに、きれいな好きでしょ?」と先生が話しかければ賛成の声。

「何がおもしろいのか、話し合ってみてね。それから、色をつくってみるからちょっとみて」と、市販の赤・黄・緑の着色料の粉末を三人の生徒に渡し、きれいな色水をつくらせると、生徒たちは子供っぽくはしゃぎ出し、色をまぜ合わせてみたりしていました。できた色水がジュースの色と同じであることはすぐに確認されました。しかし、こうして着色したものを飲みたいかと訊くと、生徒たちはやっぱり飲みたいと答えます。

班ごとの話し合いに時間がかかったので、予定されていた添加物の体への影響については翌週にまわすこととして授業を終わりました。

程編成上も裏付けに問題があり、家庭は両性が運営すべきものだという点で共通理解が得られ、「家庭一般」二単位共修が決定した。

家庭科教員七名は家庭科の共修を根本から、継続的に研究することにしたが、当時は資料も少く暗中模索の状態だった。東京都庁の高部指導主事(現在文部省)に相談し、都のグループ研究に採用され、助成金も出るようになった。

小・中・高の家庭科を見直すところから始めて、毎日遅くまで研究したが、つくり出す喜びは大きかった。山手、下町、多摩の3地区13校で家庭に関する意識調査を行ったことが参考になった。そうやって骨子をつくり、49年から共修の授業を行った。

教員全体が民主教育をめざしており、男女差別についても関心があったので、全職員の責任において「家庭一般」の指導目標および授業内容が自主編成された。

【副読本をつくる】

その頃教科書はすべて女子向で適当なものがないので、家庭科教員全員が週に一度集まってちえを集めてプリントをつくった。山のようにプリントができ、生徒がノート

話し合い

昼食のあと、七人の家庭科の先生と、教頭先生、教務主任の先生の参加も得て、和田典子さんの司会で、共修家庭科について話し合いました。

いろいろなことが話題になりましたが、結論のようになった部分をおしらせします。

◆高校生は映像に敏感だし、立派な視聴覚室もあるので、ビデオなどもっと活用すべきだが、自分の体を通して体験したことのほうが身につくので、実習はやはり大事。

◆生徒はふだん加工食品ばかり食べていて添加物にも無関心。「ぎょうざなんか手づくりする家はないんじゃない？」とか、「冷凍でないハンバーグは食べたことがない」と言う子もいる。今の子どもはたいへん受け身で、食生活の主人公になっていない。親たちも食生活に無関心。「知る」ことが「考える」とにつながるので、まず知識を持たせることが必要。

◆食生活と家族生活は大きくかわっている。家族揃って食事をたいせつにしようという気持が親子ともにならない。父親が家で食事ができないのが問題。家庭科だけでは解決しない。

◆保守的な土地で、殆どどの母親が働いているにもかかわらず、家事は母親の仕事となっているが、学校では男子が家庭科をやるのがもう当り前になっている。男子は日によってムラはあるが、女子よりも積極的に学習する。

経済の話など、女子はダメだが男子は大いに興味を持つ。調理実習でも男子は生き生きとしている。今の世代が家庭生活を変えて行っている。

◆農林高校としては、今は2単位必修だが将来は男女4単位必修をめざしたい。国の制度として男女選択になったとしても、学校としては男女必修にするだろう。

◆農林高校から転出した先生は、よそで共修をやっていない。共修の授業をするには、相当の下準備が必要で、家庭科の先生が一人だけという学校では困難。農林高校は七人の先生が協力し合い、調理室も被服室も三つあって、設備も整っている。それでもまだ十分ではないが、よそより条件はよい。普通高校でももっと条件をよくして実施できるようにしなければならない。

そして、農林高校の先生から「これからがんばります」という発言があって、散会となりました。

(記録・まとめ 梶谷 典子)

授業参観の感想

◆新田マサさん

1. 家庭科学習に対する生徒の授業態度はごく自然で何の違和感もない。むしろ当然のことと受けとめているように思えた。多分長年の実績かもしれない。

2. 家庭科の授業内容は生徒の生活実態をよくとらえて自主編成されていた。特におべんとあの栄養価の調査は身近な学友の例であり、また生徒自身のアンケート調査でもあって非常に効果的であった。(実際に調査しまとめて図表にすることは大変である)その努力に感心した。

3. 受身の食生活を実感として解らせるには実習・実験を通してだということ、それも男女差はない。(女子だから知っているとはいえない)

4. 家庭科を学習する上での男女差はない。人間として自立し、真の男として女として生きていく基本を学ぶ教科として青年期にも共に学ぶべきである。

◆斉藤美保子さん

食生活の授業こそ、男女共学で学ぶことがお互いの違いと同時に共通理解になる、ということがごく当り前という感じであった。

例えば、一日にカルシウムを必要量摂るためには、ごはんにして、250杯に当たることは、不断の食品からは不可能であり、男子の食欲にしても及ばないこと。鉄の役割での先生自らの分娩経験の話は、自分達が生命を生み育てる主体であり、異性への尊重といったわりを共有できたと思う。また、多くの食品添加物が使用されている中で、男子生徒が「気を付けている」と発言したことは、他の生徒にショックを与えていた。

現代の高校生は、「人間らしい食生活」ということを知らされずに、闇雲に「物」を食べる。その中で、自分たちの食生活の現状を見つめ、男女が協力して、話し合い、調査することは、共通の手がかりとして大事であると思う。そして、他人事でない、「食文化」を自らの手で創造していくに違いない。

を取るのにたいへん時間がかかり、授業全体は急ぎ足になりがちだった。そして、教員のメンバーが変ると一からやり直さなければならなかった。

そこで、副読本をつくることになり、共修が始まって6年めの夏休みを返上して原稿をまとめ、暮に2年分の本ができた。今使っているものは2度目に印刷したもの。本があると新しい先生もすぐに骨子がかかるし、生徒も全体の見通しがつく。教科書としては、今は一ツ橋出版の共修用のものを使っている。

【生徒へのアンケート】

農林高校では、共修「家庭一般」の履習を終えた二年の男女生徒を対象として、これまでアンケート調査を行うこと六回。おおよその結果は次の通り。

(1) 興味のあったもの、印象深かったもの
男子は常に食物がトップで最近ますますふえる傾向。女子は76年、77年は「子どもと家庭」がトップで、以後食物が急増。

83年の結果をみると、男子は食物68%、子どもと家庭6%、家庭と経済10%、家族15%。女子は食物82%、子どもと家庭11%、家庭と経済7%、家族1%。

(2) 一番大切だと思ったのは

男女とも大体家庭経済がトップ。次が子どもと家庭。女子では1位と2位の差が小さい。

83年の結果では、男子は家庭経済36%、この年だけ家族が2位で24%、食物18%、子どもと家庭15%。女子は家庭経済42%、子どもと家庭31%、家族18%、食物8%。

(3) 一年間で考えが変わったこと(3つ挙げさせた)

「家庭のあり方と子どもの性格形成」が一番多く挙げられている。全体として、男女差はあまりない。

(4) 一年間の授業をどう思ったか

83年の結果
男子 女子
大変よかった 19% 10%
まあまあよかった 63% 85%
つまらなかった 18% 5%
大きな傾向としては、よかったがふえ、つまらなかったが減っている。

(5) 男女共修にしたことについて

83年の結果
男子 女子
共修してよかった 65% 84%
共修の意義不明 20% 16%
女子だけやればよい 13% 0%
「よかった」が大体ふえ続けていると言える。

久保田真苗議員

との懇談

駒野 陽子

10月1日、前回の選挙で参議院議員（社会党）になられた久保田真苗さんを訪問して、家庭科の男女共修についてお話をした。

差別撤廃条約批准にむけて、日本の高校家庭科女子のみ必修を改めなくては…という問題意識は、議員さんの間にも多少あるのだが、男女の教育課程を同一にするには、男女とも選択でよいのではないか、という意見が強いので、なぜ男女共通必修でなくてはならないか、という根拠を示すために、男女共修家庭科の具体的な内容を知りたい、というご要望があった。そこで、当会の芦谷、仲野、駒野の三人が、「すすめる会」の資料やパンフを持参してお訪ねしたのである。

三〇分、という限られた時間なので、私たちの会の運動の経過や趣旨をひととおりご説明し、共修家庭科の内容については、現在世話人会で検討中の試案をお見せしたり、これまで共修家庭科を行っていた高校・中学の実

文部省の新しい連絡会議へ要望書

文部省の中に「児童・生徒等の急増・急減対策等に関する省内連絡会議」が生まれました。委員長は事務次官佐野文一郎氏。

第二次ベビーブームなどの影響で教育人口が大きく変動するのに対応して、学校教育の諸制度について考えようというもので、学制改革についても検討を始めるということです。そこで、八月の世話人会の決定に従って次のような要望書を送りました。

要望書

新しい学校制度の検討に際して、次の点

実践など（ピンクパンフ、黄パンフなど）を示して、具体例をお話した。しかし、試案はまだ項目中心で、中味が家庭科の先生でなければ見当が付きにくいし、実践例も部分的内容なので、十分納得していただくに至らなかった。時間も短かったため、私たちの趣旨を生かして編集された一橋出版の教科書や資料案などをもって再度お訪ねするお約束をして帰った。

10月25日、再び、資料をもって訪問。国会で、家庭科男女共修必修の考え方を議員さん

について十分考慮されるよう要望いたします。

1. 男女平等をすすめることが教育の重要課題のひとつであること。
2. 教育課程は男女同一でなければならないこと。
3. 男女共学をすすめるなければならないこと。

男女平等をすすめるための教育は学校制度のあり方によって左右されるので、差別撤廃条約の規定を尊重しながら検討してほしいこと等を書きそえました。（梶谷典子）

たちに、お知らせいただけるよう、機会をつくっていただきたい、とお願いを重ねた。「婦人の十年」推進議員連盟の事務局長をしていらっしゃる粕谷照美さんは、教組出身でもあり、少くとも、連盟の委員のみなさんくらいには、わかってもらえるようなロビー活動をすすめるなければ…と話し合ったが、田中判決以後の国会の状態では、年内には、どうにもならず、選挙後、というロビー活動をするか、が課題である。

世話人会報告

△九月二十四日▽

秋号発送後行う。

一、都立農林高校授業参観については非会員には宣伝のハガキは発送しないが、世話人は出来るだけ多くの人に声をかける。

一、当日の司会和田、記録梶谷、受付中嶋

一、文教委員長への働きかけ―土井たか子氏を通じて再度お願いする。（担当・中嶋）

一、新しい会員名簿について

冬号に同封出来るように馬場、桑原さんが準備して下さることになった。

一、中学の技術・家庭のパンフについて

次回の世話人会の時に持田さんから概略を提起していただく。

報告

山形の世話人佐藤さんによると、山形では家庭一般の共修授業のためブロック別に研究会が持たれているとのこと。（中嶋里美）

△十月十九日▽

公開授業のあと、東青梅駅の近くの喫茶店で開きました。

まず、情勢は大きく変わりつつあることが話

題になりました。文部省のお役人も「家庭科は女子教科ではない、人間のための教科」と言い、校長会の先生も「家庭科は男女で学ぶ時代」と言うようになっていますが、「男子も必修」に対してはまだ抵抗が強いようです。新しい運動のすすめ方を考えなければと話し合いました。

◆きめたこと

- 次の集会の概要 ●会員名簿のだんどり
- 文部省の「児童・生徒等の急増・急減対策等に関する省内連絡会議」へ要望書を出す（6ページ参照）

●国会に対してはもう少し様子をみて働きかける（梶谷典子）

△十一月十六日▽

▼この日の朝刊に出た中教審の審議経過報告をめぐっての話が交わされましたが、何よりも実物を手にし、きちんと読んで、私たちの側の視点からこれを批判していこう、ということになりました。（8ページ参照）

報告事項

- ①48団体の取り組み。年金制度改革、雇用平等法に関して関係方面に要請・要望を行う。
- ②労働省婦人少年局は、婦人局として改編整備されるとのこと（15ページ参照）
- ③婦選会報は改修工事完了、十五日お祝の会

があり、「会」から和田さん出席。二十日以後「会」の荷物を運び入れ整理する。市川房枝展示室をはじめ、きれいになったとのこと

④神奈川TV「七百万人のひろば」で共修問題をとり上げる（16ページ参照）

⑤持田さんの共修問題の論文、川崎市婦人室の論文審査で一席に

協議事項

①一月二十一日の集会について、「家庭科があぶない」のタイトルで大がかりな宣伝をし、関心をひきつけ、運動としても新しい提案をしよう。広く参加を呼びかけ、チラシを三千枚以上用意。必要な方お申し出下さい。

②中学の新しいパンフレットについて、持田さんの原案をもとに討議。ピンクパンフの改訂版ではなく、新しい構想のものとし、来春三月完成をめどにする。ご執筆をお願いする方、よろしくご協力を。

その他

- ①新しい会員名簿の進捗状況について。
- ②高校家庭一般の共修実施状況調査についてこの調査にご協力いただける方は、ぜひお申し出下さい。担当・芦谷薫 ☎03・307・9637（半田たつ子）

中教審「教育内容等」 小委員会の 「審議経過報告」 を読んで

半田たつ子

第十三期中央教育審議会（高村象平会長）の教育内容等小委員会（座長・辰野千寿上越教育大学長）は、十一月十五日の総会に、二年間の審議内容をまとめた「審議経過報告」を提出、了承された。翌十六日、第十三期中教審は任期を終え、次の第十四期中教審が近く発足する。東十三期中教審では「教育内容・方法等」と「教科書」の二つが実質的テーマで二つの小委を設けたが、第十四期中教審では「教育内容・方法等」「学校制度」の二小委を設けて進むことになろう。委員の多くは再任される見通し。「教育内容・方法等」は「審議経過報告」に基づいて審議を進め、任期（二年）内に答申に漕ぎつける。答申に基いて教育課程審議会が新教育課程の具体案を審議する。こうした段取りで進むと、新教育課程が小学校段階でスタートするのは、昭和六十七年度ごろと見られている。

さて、その「審議経過報告」全文を繰返し読んだが、何と空しい言葉の羅列だろう。急激な社会変化に対応し、未来を切り開いていく力を子供たちにつけるためには、今の学校が画一的で硬直にすぎること認めながら、その改善策はお粗末だ。

①問題行動をとる児童生徒に共通しているのは自己抑制力の欠如で、学校教育では、学習指導の改善や道徳教育の充実が必要。

②受験競争の過熱で、点数による学校の序列化が進むと、各学校の特色が希薄になるから受入れる学校の特色に応じて選抜方法を多様化することが必要。

③今後特に重視されなければならないのは、子供の自己教育力を育成すること。それには実物や本物教育、体験的学習などで学習への意欲を持たせ、問題解決的、問題探究的な学習方法をとるのがよい（それなら家庭科におまかせ！と言いたいな）

④知・徳・体の調和のとれた人間形成をはかるには、基本的生活習慣のしつけ、自己抑制力に裏付けられた自主性のかん養など、特に徳育の充実に配慮することが必要。

気になるのは、初等中等教育を通じての教育内容等の基本的課題として、「戦後の教育における形式的な平等主義の強調や入学者選

抜の圧力等」が教育の画一性を強めたとしていことだ。中学卒業生の九四％が高校へ進学する今、義務教育の完結として中学校を考える意味が薄れたといい、一人一人の能力・適性、興味・関心等に応じた教育をとうたっている。この「能力・適性」が、何度も何度も出てくるのが大層目ざわりだ。そして義務教育の一律の就学強制について疑義が出、場合によっては就学を強制しないなど、もっと柔軟なものにしてはどうかとの意見があったことが、わざわざ記されている。

小学校低学年では国語・算数中心に。一斉指導からグループ指導、個別指導を取り入れた指導へ。中学では、能力・適性に応じ、教科によつては習熟の程度に応じた指導を工夫せよ。高等学校では、多様化を一層進め、学校間で単位互換を積極的に展開せよ。高校入試を改善し、学校の特色をもたせ、普通科でも推薦入学を。エレクトロニクス技術やサービス経済化の進展に対応できる職業教育、などという言葉もある。

抽象的な美辞麗句の中に得体の知れぬことを藏した「審議経過報告」だ。答申に仕立てる第十四期中教審に目を光らせ、働きかけをしていかななくてはならないと思う。

全国家庭科教師 一八六六人の意見

全国高校長協会
家庭部会報62号
(58・8)より

芦谷 薫

昨年7月に家庭部会が実施したアンケート調査の結果が報告された。この調査は「男女には性差があり、その性差と、母性を育てる教育（将来よい母親になるための教育）について」という前提で設問に大いに問題のあるものなので、その結果には興味津々。まずは考察つきの内容の一部をどうぞ。

1. 男女の差異について

身体的生理的差異のみとするもの15・5％、精神的心理的差異もあると考えるもの80・6％。前者は年齢が高いものほど低く後者は逆の数値。

2. 母性を育てる教育について

必要93・9％、必要ない2・5％。前者は年齢の高い程高い数値。わからないの回答には、「母性・父性を含めた人間を育てる教育が必要」との注があった。

3. 母性を育てる教育の内容について

女性の健康管理30・4％、家庭教育の在り方27％、乳幼児の保育20％。妊娠分べん19・9％。その他の内容として、人間として親としての生き方、生命の尊さ、人間の理解、男子にも教育せよという意味で男性の母性に対する理解、母性保護の意義、道徳教育、性教育等。

4. 母性教育はどの教科で

家庭科42・2％、保健体育28・1％、HR13・4％。

5. 女性が職業をもつことについて

子どもができても続ける40・1％、子どもで中断再就職を34・2％。前者は年齢が高い程低く、後者はその逆の数値。女性が職業をもたなくてよいはずか1％、「家庭科の先生に聞いたのだから当然であろう」と考察している。又、その他が多い数値を示しているが、本人次第、個人の能力、家庭の事情や職種によるなどと共に家事育児との両立という「悩みが目立つ」、又育児休暇や職場復帰の確保など「企業や行政への注文もあった」と報告している。

6. 夫と妻の家事分担について

妻が主というのが60・7％で一番、平等分担が24・3％で次点。「その他の項目に現在

働いている先生方の悩みが目立つ」と三番目に多い回答に寄せられた意見を紹介している。

7. 小・中・高における家庭科の学習について

現行通り34・3％（年齢が高い程高い数値）小・中・高通して男女同一24％（若い年代程多い）。三位はその他。四位が小・中同一高校女子のみ必修。従って高校女子のみ必修は49・9％。その他の内容として、小・中男女同一高校で男女共一部必修、小・中まで現行どおりで高校で男子に一部必修、小・中男女同一高校女子のみ必修。小現行通り高校男女別内容の必修、現行中学のスタイルを高校にもと、「何らかの意味で高校でも男子に家庭科を学ばせるべきである」という意見がたいへん多い」と報告している。又小数意見として、女子にもっと履習させるべき、小学校の低学年より学習すべき、中学の相互乗り入れ分野をもっと広げるといった意見もあったようだ。

「こうしなければならぬ」という論点から回答したもの、現状を考えるとこんなことから」という論点からの回答とが混っているように思うが、過半数が家庭科は女子の教育とは考えていないことが示されている。家庭部会は最近家庭科教育の位置づけを「人間

教育」と言い出しているが、ならば尚のこと男女に差異をつけた教科にしてはならないはず。教育の理念を現状に屈服させること程恥ずかしいことはないと思うが、現場の先生方にこの点考えていただきたい。

日教組第二次教育制度 検討委員会最終報告

「現代日本の 教育改革」から

時枝 捷子

一九七四年の第一次制度委の報告「日本の教育改革を求めて」以後のはげしい変化をふまえて、日教組は今回第二次報告「現代日本の教育改革」を発表した。

その基本理念は――

1. 生涯にわたる発達と学習の権利の実現
2. 選抜から選択への原理転換
3. 子ども青年の自立と自治
4. 地域に開かれた学校自治
5. 教育を住民自治の一環に
6. 教育への国民参加と教育行財政の民主化
7. 国際連帯と平和教育
8. 自然との共存をめざす教育。

その中から、女子教育の問題と教育制度の改革についての提案を紹介しよう。

女子教育について、今回はとくに節を改めるべいているのが特長である。

「女子教育問題は、女子を対象とした教育問題ではあるが、同時にそれが男子をふくめた人間解放のための主体形成および全面発達につらなる問題である」とのべ、今日の女子教育問題の重要性を指摘している。

十項目の課題から主なものを紹介すると、男女平等教育の徹底、家庭科をはじめ、男女共修、男女の共同学習の実現をはかる。そのためには「女子特性論」に対する、徹底検討が必要である。男女ともに「夫婦」となり、「親」となることのもつ意味を明確にすることもふくめて、新しい家庭科教育への積極的な検討。「純潔教育」「保健教育」をこえて、「愛と性」の意味、あり方を問う。男女ともに学ぶ教育をカリキュラムの中に位置づけることの検討、などをあげている。

教育制度については、次のような地域総合中等学校制度の構想を示している。

①現行の中学校、高等学校を接続した新しい青年期の教育機関として、六年間の地域総合中等学校制度を創設する。地域総合中等学校は男女共学とし、学区は小学区制を原則とする。

②前期を中学校、後期を高等学校とし、中学校から高等学校への進学にあたっては、選抜試験は行わない。

③地域総合中等学校の教育課題は、国民的教養としての普通教育および専門教育を施すものとし、その編成は学校や地域などの実情や生徒の選択に対応して柔軟に編成される。

④地域総合中等学校への就学は、すべての青年の権利として保障される。教育は無償制とする。

「現代日本の教育改革」は、約三十七万字、四〇〇字詰で約九三〇枚にも及び、長文のものであるが、今日の子ども、青年の現状を適確に分析し、具体的かつ詳細にわたって提言をしているので大へん読みやすい内容となっている。政府自民党も今回の衆院選の目玉として、「教育制度の改革」をあげているが、人間疎外の現実の中にあつて、どちらが、すべての子ども、青年の発達を保障し、人間連帯をより深くしていく提言であるかはあきらかであろう。

国際家政学会 アジア地区家政学 セミナーに参加して

木村 温美

家庭科教育は第三分科会の三つの柱の一つとして第二日に提言及び討議が行なわれた。三名の話題提供者のテーマは規せずして、「男女共修の家庭科」であったこと、四つの分科会中、最大人数の参加者であったことから、この問題の重要性がわかる。

スリランカのワラダ女史(Mrs. Weragoda, Edna Yome 国立師範大学講師)は、現行技術科に代えて新しく中学校に男子を含めて履習させる「生活技能(Life Skills)科」を導入される計画があり、その紹介であった。この生活技能教育の構想は、家庭生活だけでなく広く労働・職業の基礎技能を範囲とし、わが国の職業・家庭科構想に似ている。

日本からは私が(1)差別撤廃条約と家庭科、(2)日本の家庭科の問題点、(3)共修家庭科の必要理由を述べた上で、共修実現への方策として、(4)共修に適した内容構成をすること、

(5)国内行動計画に共修家庭科の推進を入れるよう働きかける、(6)全教科にわたり教科書の性別役割固定解消のための見直し、(7)広報活動、(8)共修家庭科の効果を科学的に立証し、さらに良い方法をみつけ普及するための研究活動の必要、を述べた。

フィリピンのコバズ博士(Dr. Corpus, Aurora フィリピン大学家政学部長・国際家政学会副会長)は、一九八三年に文部省が公示した新しい小学校カリキュラムの紹介が主であった。新カリキュラムの共修家庭科は、一九八六年から、第四・五・六学年に実施が予定されていること、旧制(現行)では家庭科と労働教育が小学校四・六年女子だけであること、新しい教科は、初歩的農業・産業技術・小売業その他暮らしのための諸活動も対象として含み、名称は「家庭及び生計技能科(Home Economics and Livelihood Education)」であるとのことだった。

このあと、もう一つの柱である地域社会教育についての話題提供があった後討議に入った。

家庭科の男女共修に的をしばって討議の模様を述べると、先づ特筆したいのは韓国のある大学家政学部長さんの発言である。「今ここに出席している我々の家庭には、みな二一

三人の使用人がおり、家事はわれわれもあまりやる必要はない。まして子供たち、特に男の子には家事をやって貰いたくもないし、やらせたいとも思わない。それより親として願うのはしっかり勉強して良い学校へ入ってもらいたいことであるから、共修家庭科は考えられない」というものである。一瞬シーンとして声も出なかった。しかも他の討議題もあるため直接の反論も出来ぬまま話題は移っていった。シンガポールからは「民族の特長を生かしたカリキュラムが必要で、ある一つのパターンを押しつけてはいけない」と、多民族国家らしい発言があり、マレーシアでは、家庭科は四つの選択科目の中の一つということで、共修家庭科は前途遠慮という感じがした。しかし記録者席から、先刻の韓国の発言はそのまま記録してよいか念を押してほしいと発言があり、再度の韓国の家政学部長さんの言葉は、「人間生態学としての家庭科は、小学校から大学まで誰でも必要だから、将来は共修家庭科が望ましい」という意味の訂正発言であった。アジアでの家庭科共修は、北欧・北米などに比べ実現は道遠しという感が深い。しかし、各国の実情をじかに聞くことができ情報交換の絆が出来たことは収穫であった。

各地から

山形でも男子の家庭科が 研究テーマに

佐藤 慶子

差別撤廃条約の批准を前に高校家庭科の男女共学が改めて話題になっている。山形でも高校家庭科の研究部会で男子の家庭科履習が研究テーマになっていると聞いている。直接タッチしているわけではないので、詳しくはわからないが、県内の各地区から研究委員が選ばれ、基本となるアンケート調査と、カリキュラム研究の両面から検討されることになっているとのことである。来春までには一応のまとめがされるところなので、どのように研究がすすむかが期待される。

これまでのところ家庭一般の男女共学はほとんどなく、選択の食物などで男子を受入れているところがあるようである。しかし、家庭一般を受けていない男子の選択科目履習は例外的なものであることが行政側から指摘されているとのことである。したがって現状の

ままでは、家庭一般を学ばせる以外に男子の家庭科履習に道を拓くことはできないようである。その意味でも、今回の家庭科部会の研究は大きな意義を持っているようだが、現場では男子の家庭科履習のイメージが湧かないとの声もあるようで前途は厳しいものがある。場合によっては男女共学ではなく男子だけの家庭科が設けられるのではないかとの懸念もあるようである。

というのも、中学校の相互乗入れがほとんど別学で行なわれているという事情もあるからである。私どもの調査でも中学校の技術・家庭科で一部共学が試みられているのは十校あまりであり、他は別学のみである。

とくに、中学校の技術・家庭科の週配当時間が一学年二、二学年二、三学年三となっているため、相互乗入れを三年生で行なおうとする時には食物Iは女子が履習済みで男子と一緒に行えない、という不満を現場から聞かされた。

その上、山形は小規模校が多く、中学校で専任の家庭科教師をおくことがなかなか困難なようである。家庭科と他教科を兼任する教師や他教科の担当者が家庭科も兼任することが多いとなると、ただでさえ忙しい家庭科担当者は授業に忙殺されることになる。

地域の教育が充実するために、せめて家庭科の専任教師を中学校で配置してもらえないかと思うこの頃である。

埼玉県の技術・家庭科 男女共学のように

竹内 和子

「家庭科教育は自立した生活をするために、男子にも必要である」と言うことを私が知ってから、十二、三年経つでしょうか。

私の前いた学校で一年生に共学を始めたのが四十七年でした。「男子にも家庭科？えーっ 調理を教えるの？とてもできない」と言う人がいました。

市の研究会でも話し合い、技術科とも一緒に部会をもったりして、共通理解がもてる様にして来ました。また、年一回の全体発表の時には、率先して、全職員に理解してもらえ様に訴えて来ました。

また県の教研でも、毎年、共学・共修について話し合いました。参加している人は、それを認め、実行したいと言っていました。

しかし、その障害となっているものは、十分な教員の配当でなかったり、時間割を作る

ときに不可能になることがあります。

しかし、やはり、少し無理をしても、共学にしていこうという気持ちがまだ少ないことが問題です。共学のレポートを見たときはやれるなァと思うらしいけれど、ついつい今までの女子だけの家庭科に甘んじている様です。ところが、共学が点・点と増えていたところへ、相互乗入れが生まれ、これを一つの契機にして、増えています。

埼玉では全面共学は一、二校のようです。市単位で共学を実施しているところが、三市程あります。これらは一年生だけだったり、一・二年だったり、一・三年だったり、それぞれ、前に述べた学校の教員配当や持ち時間に左右されています。

しかし、家庭科教師の中に「男子には教えられない」と言う声は、聞かなくなりました。そして、職場が民主的に運営されているところであれば、やりにくいこともあります。

東京都公立中学校における 家庭科の男女共学の 実態調査（要約）

知識 明子

男女共学の実施校は七八年二九校（解答二

二六校中）から八三年九六校（解答一五五校中）と大幅に増えています。どこか一学年のみ実施という学校が六六校（そのうち一年生のみが五八校）と約三分の二ですが、二学年あるいは全学年共学をしている学校が三十校とこの点も増えています。また、部分共学ではなく全面共学実施校は五校です。

領域の面では、食物領域八五校、被服領域一〇校、保育領域一五校、住居領域一四校と依然として食物領域実施が圧倒的に多いのですが、敬遠されがちだった被服領域も実施されるようになってきているのが特徴です。

問題点としては、共学を実施していた学校でも教師が転任すると別学にもどってしまうことがあることです。逆に言えば教師がその気になれば実施が可能であるということですから、職場で一人で考えている人と話し合う機会をつくり、共学を広めていく必要があります。（都教組教育研究協議、家庭科部会で実施した資料による）

東京都教研 家庭科分科会の討議から

谷口久美子

小学校4、中学校8、高校4、計16本のレポートの報告をうけて次の柱で話し合った。

- ◆子どもや学校はどうなっているか、◆家庭科の重点課題は何か、◆家庭科で何をどう教えるか（住、食、共学、衣領域の順に）◆研究運動のすすめ方。

レポートはいづれも、子どもの現実をふまえ、組織的、恒常的に研究をつみ上げたものばかりで、水準の高いものが多かった。

また、教育研究協議から、技・家科の共学実態調査の報告があった（要約は別稿で）

——討議のなかから——

男女共学をどうすすめるか

別稿の実態調査が報告され、そのなかで「共学の困難点」としてあげられ、行政側も問題にしている「男女差」をとり上げ、話し合うことになった。そこで出た意見は、

★家事労働の経験に差はあるが、技能差はない（高）★十数年目に共学を試みた、男女が相互に啓発し合うのがよい（中）男女差はあるが支障ではない（高）授業のねらいを明確にすることが重要（中）関心や興味はちがうがその交流が大切（高）これわれている役割分業を再生しようとする攻撃をけいはいすべきだ（助言）などであった。

都教研 女子教育分科会報告

武市 成子

東京教研女子教育分科会は十一レポート提出された。内容は男女平等のプロジェクトチームから働く母親の生活実態意識調査の報告、女子の進路指導、性教育、女子のくずれや非行問題、家庭科の全面共学実践、女子のリーダーそで、総合的な女子教育など多岐にわたっていた。

家庭科の男女共学にかかわっては、瑞雲中学の三年間の共学実践の概要と、従来共学実践しにくいと言われている被服実践について子どもが生々ととりくんでいる内容、東京の共学の実態についての報告がされた。共学にかかわっての討論はほとんどされなかった。(どのレポートについても討論はほとんどできなかった。)

小学生から高校まで、生きることと結びついた性教育が、男女平等教育の一環として必要であることが討議され、現在行なわれている、家庭科・理科・保健体育・学級活動・生活指導などのとりくみが報告された。

神奈川県教研での 男女共学についての討議

中沢美智代

今年の県教研では、この問題の柱が設定されてなくて、家庭科分科会からの要望で二日目の最後に一時間だけ持たれることになりました。

レポートがなく、話は成り行き任せで、県教研の水準の低さがあらわれていると言わざるをえません。話し合いのなかで出されたことは、①「男女共学賛成派推進派といっても、底が浅いのではないか。それに女教師側から猛反対がある。」②「男女差が互いの内容水準を下げてしまう。」に対して男女差はない、個人差があるだけであるとの反論。水準が下がるから問題だとする技術科の方に問題があるのではないかという意見。③神奈川県A・テストが共学を妨げている。④共学といっても、技術科か、家庭科のどちらかに引きこもつとする動きがあるのではないか。などが話題に出されました。しかし、発言者に偏りがあり、司会の打ち合わせも不十分であったため、時間切れで中途半端に終わりました。全

長野県教研に参加して

持田 ナミ

分科会討論の前に、技術・職業教育と合同の話し合いをしました。

目的は、技術・家庭科の男女共修を進めるための意見交流でした。

高校にも二単位ぐらい技術教育を入れたい、という意見と、建築科と電気科に女子がいたが、作業の中でも男子との差は殆んどなかった。技・家が別学でなければならぬ理由はない、むしろ不自然だという発言が男性から出されましたが、共修を積極的に進める具体的な発言はありませんでした。

高等学校では、家庭一般の共修が全国に先がけて実施され、研究も進んでいます。が、中学校の技術・家庭科では、一部乗入れて八割ぐらいの学校が共学を取入れているとのことですが、大部分は、一年生の食物Iと木材加工を実施しているらしいとのことでした。

各地からの報告をお待ちしています。(編集部)

国際婦人年日本大会の 決議を実現するための 連絡会報告

和田 典子

(一) 雇用における男女平等法制化に関する

要請を労働省に提出(10月1日)

連絡会では、八五年までに「条約」が批准できるように、雇用における男女平等を確保するための法整備に尽力することを、労働大臣に対して要請しました。

(一) 日経連に雇用平等法に対する積極的態度を求める申し入れをおこなう(10月6日)

男女雇用平等法の制定について、日経連が反対声明を発表することに対して、連絡会では急いで考え直すように要求しました。

(一) 年金制度改正における婦人の年金保障および婦人の地位改善についての要望(第二次案)

会報秋号でお知らせした申し入れの趣旨から、7月15日の社会保険審議会の「制度改正に関する意見」について、さらに学習、検討を加え、改正案を策定するよう要望することができました。

(一) 婦人関係行政機構改革について説明を

受ける

さきの国会で成立しましたが、右の案件について、総理府婦人問題担当室長・松本康子氏と、労働省婦人少年局庶務課長・吉田一彦氏から、10月28日の全体会で説明を受け、意見、要望を出しました。

それによると、婦人問題担当室は、

総理府本部——大臣官房——審議室に所属し、一九八五年までは従来通りの機能を果たすが、一九八六年から以後のことは未定(国連では二〇〇〇年にむけて構想しているが。)

婦人の十年を根拠にした機構なので、改廃はありえないとのことでした。

婦人少年局については、既に通知があった通り、再編されて婦人局と変わり、庶務、機会均等政策、婦人労働、婦人福祉の四課構成となります。

また、少年保護については、労働基準局——賃金福祉部——企画課——勤労青少年室に移され、地方労働局の所掌事務のなかに明記している、ということですが、

いずれも、臨調答申にそった「労働省設置法」の形式整備なので、実質は変らない、ということですが、今後も監視が必要ですが、

尚、今後の婦人労働行政の目標、として次の三点が示されました。

①「条約」批准にむけて雇用平等についての法的整備

②パート及び家内労働もふくめた婦人労働の保護対策

③家庭と職業の調和および家庭基盤充実などの福祉対策

二つの集会

《核兵器廃絶と軍縮を実現するために婦人の行動を広げる会の動き》

10・24反核・軍縮・平和のための東京行動が実行委員会の主催でもたれました。また、10・29には「広げる会」の独自活動として、これからの平和運動を語る会がひらかれました。わたしたちの「会」は、結成のよびかけに応じて「広げる会」に加盟していますが、手が足りず具体的な行動には参加できていません。

《12・8平和を守る母親集会》

日本母親大会連絡会が主催する恒例の集会が12月8日午後、久保講堂で開かれるにあたって「会」に協力要請がありました。「会」ではカンパでこれに応えることにしました。

(和田 典子)

共修問題 久しぶりに テレビに登場

樋口 恵子

十一月十三日(日)十一時、家庭科の男女共修をすすめる趣旨の番組がパッチリCMなしの三〇分、テレビに登場しました。テレビ神奈川というU局で、全国放送でないのが残念ですけれど。出演者は、会員の半田たつ子さん、長谷川孝さん、そしてキャスターの樋口恵子、スタジオ出演者は、アシスタントを除いて全員が会員でした。

きっかけは、この十一月開かれた「83江の島会議」に長谷川孝さん(毎日新聞記者)が、これまでかかわってきた家庭科の男女共修をテーマにパネラーとして登場したことです。「83江の島会議」は、男女平等をすすめる神奈川県一年一回のメイン行事。そこでの長谷川さんの発言を受けて、TVK「七〇〇万人のひろば」が「We」編集長の半田さんと長谷川さんをお迎えして、県内の実践、これからの問題点を話し合ったわけです。

内容はまず、中学、高校での家庭科の位置づけを紹介すること。会員の皆様にはわかり切ったことでしょうが、日曜は、朝寝坊して起きたばかりのパパたちも聞いているのですから、実態を正確に知ってもらうことも大切だと思います。昨年、神奈川県が策定した「女性プラン」にも家庭科の男女共修が謳われていることもアビールできたと思います。半田さん、長谷川さんから「家庭科の男女共修論の根拠」「これからの行方」など説得力あるお話をうかがいながら、フィルムで紹介したのが県立相原高校(男女ほぼ同数、農

業科)の共修風景。昨年度、「女性プラン」に基いて県教委に「家庭科男女共修推進研究会」が開かれ、その研究指定校の一つであり、指導は福島澄香先生。家族の生活時間を調べて討論したり、最初の買物から男女ペアで出かけての調理実習など。「家事は大へんだけど、それが義務なんだから女がやればいい」という男の子のホンネを含めて、実に明るく活発な討論風景。落ちこぼれも、無気力もない教室の生徒の表情が、何よりも雄弁に家庭科男女共修の意味を物語っていました。

事務局だより

桑原 芳子

婦選会館が十一月十五日増改築完了、完成されました。二十二年目に新装なった同会館は鉄筋三階建て・延べ八百二十七㎡。従来より百七十㎡増築され、市川房枝氏の遺品を集めた常設展示室、交流の場となるラウンジの新築、図書室、会議室の改修、充実がなされました。コスモスの花を愛した市川房枝氏にちなんで遺品展示室の入口

にはコスモスに囲まれた市川先生のはほえみがみられます。

この婦選会館の屋上にある三畳あまりの部屋に事務局がおかれることになりました。「理想選挙推進市民の会」「国連NGO国内委員会」との共同使用ですのでスペースは広いとはいえませんが、会の根をおろす場所ができたわけです。会館の外に建てられています看板もぬりかえられ「共修をすすめる会」の文字がくっきり浮び上がっています。婦選会館の新たな出発と共に「共修をすすめる会」も飛躍の一步を記したいものです。